現代中国における帰郷農民工の生活展開と起業活動に関する研究
―家族の再編を視点とした江蘇省・河北省農村部の調査から―

李　丹

本論文は中国において郷里の村落・郷鎮及びその付近に出稼ぎから回帰した農民工を対象として、出稼ぎ前から帰郷後の生活実態と帰郷後の起業活動に着目し、それらを起因とする家族、ジェンダー、村落関係の変容について分析するものである。

序章では研究背景、先行研究の検討、本研究の分析枠組みと分析手法、課題および調査地の選定などの検討を通して、本研究の着目点と独自性、分析方法が展開される。改革開放以降の中国経済発展を支えてきた出稼ぎ農民工について、既往研究では出郷や都市定住のような都市に向かう農民の移動に主眼を置いてきた。しかし実態として、経済変動や、戸籍制度などの政策的制約、家庭的・個人的要因によって、出稼ぎ農民工は農村と都市の間を往還し、その多くはやがて出身の省や市、農村部に帰っていく。とくに、リーマンショック以降、出稼ぎ農民工の回帰移動の傾向が強まりつつある。そこで本研究では、出稼ぎから帰郷した農民工を対象として、経済的動機だけでなく、家族、ジェンダー、村落の価値との結びつきも視野に含めつつ、その生活展開と起業活動を分析する。社会的動機に注目するのは、出稼ぎ農民工の帰郷において、その根底で「ジャ（家）」や「郷土」に関する価値観が無視のできない要因の一つとなっているからである。具体的には、第１に帰郷農民工の人生経歴とりわけ出稼ぎ、帰郷、起業に代表されるライフイベントを把握し、世代ごとのライフコースのパターンおよび各世代における出稼ぎ、帰郷、起業の持つ意味を明らかにすること、および第２に帰郷農民工の出稼ぎ、帰郷、起業における家族、ジェンダー、村落関係との相互影響を考察するという課題が設定される。

第１章では、江蘇省中部にあるＦ村の農家について、その世帯構成を把握したうえで出稼ぎの有無によって分類し、相互の比較から出稼ぎが農村家族、村落社会に与えるインパクトを明らかにした。その結果、出稼ぎによって、１９９０年代の核家族中心から直系家族や高齢者のみ家族、「隔代（祖父母と孫）」家族の増大という変化がみられた。農家間の経済格差が広がりつつある一方、同族の結束性の高まり、村落レベル事業の増加なども観察された。

第２章では、Ｆ村の４３名の帰郷農民工を対象に、出生年代によって旧世代、中間世代、新世代に分類し、それぞれについて出稼ぎから帰郷、その後の就業・起業という人生の軌跡を概観し、家族と村落に対する意識の世代的差異と変容を捉えた。旧世代は主に息子中心の家族規範に基づいて出稼ぎが展開する。したがって、帰郷理由も起業というより家族の世話と子供の就学であった。中間世代では次第に家族と自己実現のバランスが求められるようになる。帰郷は子供のためであるが、帰郷後に起業する例が圧倒的に多くなった。他方、新世代は親世代に当たる旧世代の生き方を批判的に捉えているようにみえる。彼／彼女らは、農村に帰るよりも近くの小中都市に定住する志向性の高いことが明らかとなった。

第３章では、Ｆ村の３１名の農業・水産養殖経営者を対象に、出稼ぎ経験と起業プロセス、およびそれらの関連性を明らかにした。Ｆ村において、１９８０年代生まれの中間世代帰郷農民工を中心とする農業・水産養殖経営が特徴的である。彼らの起業におい

ては、出稼ぎ先で得られた社会的ネットワークを駆使しつつ、家族や親族から手厚く資金的、労働的、技術的支援を受けていることが明らかとなった。彼らの起業が家族の結束だけでなく、親族・村落との結束を高めたことも指摘した。

第４章では、河北省南部にあるM鎮において、５３名の農村女性を対象に、主な就業経歴と労働移動の経験についてインタビュー調査を実施し、世代ごとのライフコースの変容を明らかにした。当該地域において、農村女性の就業は農業中心から、地元での非農業就業や都市への出稼ぎ、地元での起業などへと多様化している。特に出稼ぎ、起業は女性の経済的自立意識の高まりと強いつながりを持つことが示された。

第５章では、同じくM鎮において、２４名の女性帰郷農民工を対象に、出稼ぎ経験および帰郷後の生活と就業についての聞き取りデータをもとに、各世代における出稼ぎの意義と帰郷後の起業との関連を明らかにした。女性の経済的自立意識が後の世代ほど高まっていること、および若い世代の帰郷女性が求めている人生像として、結婚、育児だけでなく、自己実現の要求も高まっていることがライフコース分析から示された。

以上の分析を踏まえて終章では、帰郷農民工における出稼ぎからの帰郷要因や動機、帰郷後の生活展開、起業のプロセスなどについて整理し、それらと家族規範やジェンダー、村落関係との相互影響について明らかにした。